令和２年２月８日　一色小学校意見交換会

出席者　17 人

１　開会
　　10:00～

２　挨拶
　　森教育長

３　説明
・永井指導主事　「第１回意見交換会で出された学校配置に関する意見の比較について」
「小中一貫教育のメリット・デメリットについて」

４．意見交換
緑が丘地区住民：資料の表にある①から③の項目は内容的には理解できるが、「目指す子ども像」に照らして考えた場合、全て同等ではないかと感じた。優先度によっては評価が変わるのではないか。
　部活動は趣旨に照らし合わせると優先度は一段下げてもいいのではないか。F 案は◎,〇しか付いていないとか、優先度の見方によって変わってくるのがあると思う、どういうレベルで考えているのか。

部長：指導主事から説明があったように、小中一貫教育を研究するにあたって、この表の左上に対して重要な視点を視野に現在研究を進めている。この３つの案ですが、これから大事にして考えていく方針である。２番目に関しては地域と学校との連携上、適切な通学距離が大切だと考える。第１回目のときに地域と学校の関係はすごく大事であることと小さい小学生もいるので通学距離は大事であるという意見をたくさんいただいた。今回一色小学校を会場に意見交換会を実施しているが、単級の学校は一定の規模の児童数が必要だということ。小中一貫校の１つの教育の出発点として考えている。なので、これを評価にするに当ってこの①から③の案を考えているが、どれが一番重要なのかはなかなか難しい所である。やはり、施設一体型の小中一貫教育を行うこと、それから地域との連携を大事して子ども達の通学距離を考えている。そこのところを大切に考えていきたい。

百合が丘地区住民：全部でＩ案まで 10 案出ている中でＦ案に非常に人気があるという話しがあった。義務教育学校という言葉が出てくるが、これについて最初に小中一貫校との違いを説明していますが、この資料を見ると義務教育学校は Ｆ 案にしか出てこない。一色小学校の義務教育学校にするという案が出てきた背景を説明していただきたい。

教育長：義務教育学校という言葉はあまり聞き慣れない言葉です。文科省はこの制度が良いと言い出したのは最近のことです。併設型小中一貫教育校と義務教育学校の違いは、先ほどの説明では校長先生が１人になりますと簡単に扱ってしまいましたが、１つの学校で１年生から９年生までの学年があり、１人の校長先生のもとで学校教育を行う。なぜ二宮が一色地区は義務教育学校で、他の地区は小中一体型にするかと言うと教員の関係があって現在校長は５人いる。そこにもう１つ中学校をつくると校長が６人になる。しかも、小さい二宮町で小学校と中学校が相乗りしてくると中学校を新設することになり、校長を１人増やすことになる。今この時代では無理がある。併設型小中一貫教育校でなくて、一歩進んだ義務教育学校はどうかと言うことになった。このアイディアは教育委員会がだしたものです。他県でも例があります。義務教育学校には隠れたすばらしいものがある。併設型の小中一貫校であると、小学校と中学校の教育目標をすり合わせて、小学校中学校を一つにして一つの屋根の下で一緒に教育をする。義務教育学校は、併設型ではできない独自のカリキュラムを作る事が出来る。例えば教科という形で総合的な学習の時間でやっているが、「二の学」という教科を作って、二宮に特化したカリキュラムを作って、子ども達が二宮について何かできることがないか、など自由に取り組める教科を作ることができる。義務教育学校を認めていただければ、先行して一色小学校で進めて、それが良しとなったなら他の小中一貫校も義務教育学校にすることも可能である。今現在のところでは一色に特別の教科ができる可能性のある義務教育学校を打ち出して、一歩先へ進んだ小中一貫教育を行いたい。

百合が丘２丁目地区住民：義務教育学校は夢のある独自のカリキュラムが小中でできる。それに対して、他の２校は施設一体型で一色小の区域が試験的に行うイメージを受けた。それだけの覚悟を持ってやるのであれば、他の２校も義務教育学校でやる覚悟を持った方が良い。二宮オリジナルの教育が出来ると思う。試験的に１校だけやるのは試された方はいかがなものか。Ｆ案も良い案ではるが、もしやるのであれば義務教育学校の３校同盟

を目指した方が良いと思う。教育者もそれだけの覚悟をもった体制でやった方がいいと思う。

教育長：人口減少のこの町で、今ここでは 20 年 30 年先の案からＩ案まで、30 年 40 年先まで見越している。町民の皆さんからＩ案が出るということは、いずれ遠い将来かもしれないが、二宮は一つの学校でもいいのではないかと言われると、それこそ一つの義務教育学校で十分足りる。今はそこに向かっての過渡期である。将来を見越して今子ども達にできることは何なのか、少しでも先行してできることは何かを考えています。

百合が丘１丁目地区住民：先程の方の質問の続きですが、③は非常に大きな材料だと思う。それで考えると先程の義務教育学校で、このＦ案の中でも△になっている。令和 12 年頃から単級化が懸念される、ここのところが非常に気になる。現段階で来年度は一色小の１年生は２クラスになるかならないのかといっている。現段階でも１クラスである。要するに、令和 12 年頃からと予想しても現実もそうなって、改善の方向に向いていないと思う。そこの令和 12 年頃からという説明は大丈夫でしょうか。この話の中には学区の再編をするということも裏にはあるのでしょうか。

部長：現在の一色小は来年度からすべての学年で単級となってしまい、それを解消しなければならないという事で、このＦ案が出された。それは地域の方々や意見交換会に出席した方々のご意見ではある。学区を見直した状態で作った案で、Ｆ案については、一色小学校区では、まず地図の中里の地域が一色小学校に学区が変わっている。中里の地域が一色小学校に入れば、一色小学校区は令和 12 年の段階では単級にはならない。単級を心配しているのは西中学校区である。考えた事は、梅沢地区を大きなくくりとして山西と考えると、茶屋や越路の方は同じ山西なので西中学校区に行った方がいいのではという意見もあったりする。山西というくくりで考えると梅沢地域が西中学校に行っていただければ、バランスが良い。それでも西中学区の方は令和 12 年位から単級が予測されます。人口が減ってくればどうしても単級は出てくる。今一色小学校の単級化の状況と十何年後かの単級の状況は違う。施設一体型の小中一貫教育で義務教育学校になっていたとすればクラスの幅、横の幅はないとしても、縦の９年間という大きさはできてきます。横がない分、地域の方々とのコミュニティ・スクールとしての運営が今以上に高まってきているのではないか。このことで横の幅を持たせる。全体の学校の規模を確保する。このことで今

とは違うものができるのではないかと考えている。

一色小学校区住民：町として小中一貫校にするという結論を出しているのかという事と、もしもそうであれば、今ここに記載されている内容で将来的にはＩ案になる。他の案は移行段階に過ぎないのではないか。そうであればＩ案に結論づけて、一貫校を作った方が良いのではないか。いずれにしても将来は一貫校にするという目的であるならば、東大跡地に作った方が良いのではないか。現在の案は今の施設をそのまま使うという案である。そうではなく、こういう意見交換会を進める中、東大跡地で作るという結論を出した方が良いのではないか。それから、アクセスの問題とかについては皆で考えたりする。将来は跡地に行くわけだったら、あまりにも現状を見過ぎて物事を考えているのではないか。

教育長：小中一貫に関しては自分の思いを話させていただいており、ご了解を得られれば是非進めたい。将来的には１つの学校という形で話をしている。将来的には 40 年 50 年後を見越していきたいというのも私の思いでもある。それは町長とも相談している。具体的に設計の段階からやろうとした場合、静岡県の例で１年生から９年生まで１クラスずつで施設一体型の一貫校を新設した。その金額を概算で見みると１クラスずつしかなくて施設だけで 17 億円、付帯設備を含めると 30 億円かかる。二宮町で作ろうとすると普通教室だけで 40 個必要になる。現在、町の状況は年間に子どもの人数が約 50 人ずつ減少している。そうすると建設するのは今ではないと思う。そこの目標に向かって今出来る事は何かと考えたら施設一体型で子ども達を集めて、修理をしながら子ども達の中身を作って施設一体型を成就させていく。コミュニティ・スクールのコミュニティも３つになったり２つになったり、どんどん集約していくことも考えられる。今コミュニティ・スクールを運営している委員の中でもみんなで話し合って、町全体の教育力として人材バンクを作って、町全体でどこの学校に行っても教育ができるコミュニティの環境になると良いと話しをしている。実際に演奏家協会の方で、ボランティアで若手の演奏家が、学校の中に入って生の音楽を聴かせてあげたいという話をいただいた。それぞれのコミュニティ・スクールで工夫し地域と連携をしています。そのようなものをどんどん集めていって、40 年後以降の先の話しではなく、今出来る事を築き上げる為に提案させていただいた。

教育委員：教育長は財政面で話をされた。敷地面積から考えると、結論は今

の状況の児童・生徒数で考えると絶対無理だと思う。大体東大跡地は人によってそれぞれのイメージがあり、とても広いと思う人とそうでもないと思う人がいる。東大跡地は３万㎡ぐらい、西中が２万㎡ぐらいで西中よりは広い。実際問題として北側は小田原・厚木道路ですぐ下にある。行ってみると分かるが、常に自動車の音が聞こえる。校庭ならまだしも校舎は絶対に無理である。それから西側はミカン山の保全地がある。東側が完全に斜面になっており校舎を建てるのは無理で、グラウンドを使うにも無理がある。致命的なのは敷地の真ん中に生活道路があり、そこを取り払って学校を作ることは通らない話である。生活道路を活かしながら作っていかなければならない。南側にはいろいろな木が植わっているが、昔は泥田でものすごく地盤が悪い。まして家が建っているので校舎を建てると、地域の方々に大きな迷惑を掛ける事になり騒音問題になると思う。今の人数の中では小中一貫校を設置するのは無理です。面積的に考えて 20 年後子ども達の人数が減ったならば自由度はでてきて可能にはなるが、現状あるいは 10 年後は敷地面積を考えると無理である。

一色小学校区住民：50 年後ぐらいには人口はどのぐらいになるのか。将来は人口が減ってしまう。今面積の問題を仰っていましたが、東大跡地をどのような理由で買ったのか。

部長：直接の担当ではないので分からないところもあるが、町として将来広大な敷地に自然が残っている場所を確保していくのはとても重要で大切な事だと思う。今後、将来に向けた町づくりの中で自然を残していきたいという判断があると思う。将来的な１つの目標としては、50 年後ぐらいに学校の用地にする事は考えていたと思う。今は人数的に 1800 人ぐらいいるから難しいところがあるが、将来 50 年後、40 年後になれば東大跡地は学校として活用したいと考えていると思う。

一色小学校区住民：自然を残すか、学校を建てるかがあったんだろうと思う。何となく使用方法は宙に浮いていると感じる。財政的な問題もあるのであれば東大跡地は考えない。H案とＩ案は消した方がいいのではないか。以前私が勤めていたときの話しですが、部下がこのような複数案を持ってきたとき「何を考えているんだ？」、結論は何かと聞き提案を返したことがある。あれもこれもと考えていっても無駄だと思います。せめてＡかＦ案かと思う。もう少し体系化して結論というか検討をしてほしいと思う。

課長：40 年後（2060 年）には、子どもの人数が中学生・小学生合わせて 600 人から 700 人ぐらいの間になり、今の二宮小学校の全児童数の規模になる。

部長： 町が人口ビジョンというものを作っているが、これから町が色々な活動をしても減っていくのは当たり前で目に見えている。色々な活動をして 50 年後の 2072 年には人口は 1 万 7 千人ぐらいになっていると想定している。

百合が丘地区住民：このような場は地域の方々の意見を伺う場で提案についてではないが、東大果樹園跡地に色々な物を建てたいと意見が多くある。今のところ大きいトラックが入っていける工事用の道路はない。例えば木造の２階建てとかであれば十分やりようがあるとは思う。しかし、３階建てとか今ある校舎のような物を建てる時は、今の工法だったらクレーンで吊って作っていく。そういう重機がどこから入るのかと考えた時に新幹線はあるし、小田厚はあるし、個人の住宅地があって遺産相続で売りに出て、どいたら道路を広くするような可能性を探らないといけない。今、町道も歩道がないなかで、大きいトラックが工事のために行ったり来たりすること自体が、そばに学童保育や保育園もあるのでどうなのか。現在は大きな課題があると思う。長期的にまず工事の前に道路の整備はどうするのかである。海側の KDDI の所も寄付があって国道と向こうの中道の間にちょうど藤田電気の所から入る道路が出来たからこそ、工事が意外と順調に進んだと思う。ただ工事ができるわけではないので、本当に長期的なきちんとした町づくりを考えていかなければ厳しいのではないか。

緑が丘地区住民：今回の説明会の中で中１ギャップの解消や小中一貫　の目的について触れられていなかったと思う。前回の説明会の時に中１ギャップの解消を目的として小中一貫にしたいという事で、それは物凄く賛成でした。小学校での勉強、中学校に入ってからの勉強との差があるのでそこでつまずく子が多いと言うことで賛成でした。最初の説明会の時にいくつかの質問があり、今までの他の学校の成功例のお話は伺っているが、失敗例はあるか訊くと「ありますね」と言われた。しかし、具体的にはどういった所が課題なのか、二宮町で失敗例が想定されて、それを解消するためにはどのような取り組みをしたらいいのかという話は一切その後も聞かされる事もなかった。失敗があった場合、どういった失敗例があり、どのように対処できるのかというのが見えないまま、成功例だけで進んでいく

のがとても気になった。
　それから小学生にとってグランドは遊び場としてとても大切な場所である。部活は中学生にとって物凄く意味がある。勉強が苦手な子どもにとっては、部活動はものすごく学生生活において大事な事だと思う。部活と小学生のグランドが被ってしまうところをどうするのか。スケジュールを組んで対処する話しはあった。しかし、半分ずつとか削って無理やり両立させてしまうのは果たしていかがなものだろうかとまだ解決されていないと思う。そういう部分で引っかかっている部分があった。
　説明会が進むにつれてＦ案の各３校を集めて一体型にするという話しが進んでいるのを見ていると、私の子ども達は一色小なのですが、今でさえ少人数で６年間人間関係が固定されるという事で心配している保護者がすごく多くいる。それが小中一貫校、義務教育学校で９年間になり多少人数が増えて、例えば１クラスが２クラスになった所で物凄い人数の変化は町内でないと思います。そうなった時に６年間をドキドキしながら、もめなければいいなと見ていたものが、９年間になると結構大きいと思う。学校は社会に出る為の練習の場と思っていて、社会人になることはもちろんのこと高校や大学で転機のところで、新しい人間関係を作る機会で、物凄く大事な機会だと思います。それを中学に上がる段階で出来ないというのは、物凄く大きなチャンスを子ども達から奪っているのではないかという懸念がある。新しい学校に飛び込んで新しい人間関係を作るというのが、中学校で出来ない分、逆に高１ギャップになるのではないかと心配もある。そういった不安も色々と出てくると１枚目の比較表で優先順位というか大切にしたいところで、１番に施設一体型による小中一貫校教育が出てくるのですが、そもそも中１ギャップを解消するのが目的なのに対して施設一体型の小中一貫校を作るのが目的ではなかったのではないか。施設一体型の小中一貫にこだわる事が大事なのか、それともギャップの解消をするそもそもの目的が大事なのかを見失わないようにしていただきたい。私自身が英会話学校の講師をしていたことと、進学塾ではなくて、中学生で学校の授業に付いていけない子ども達の塾で経験した事を踏まえて、例えば英語でいうと小学校の間は実際に子ども達に聞き取りをした。小学校では文字は一切使わずに楽しく会話をすると「楽しい」と言ってくれる。中学になると、スペルなどをチェックされて文章を訳して理解するようになるので学習スタイルが違うということを確認しました。そうなるとギャップの解消は先生が乗り入れ指導をして中学の授業を前倒ししてやる事がギャップの解消に繋がるとは思わない。英語に関して言えば英語のスペルと音を連動させていく学習方法があって、英語圏の子ども達もやっている。

そういうのを取り入れての勉強ではなく文字に触れさせるとか、一字一句単語を覚えるとか、文章を理解するではなくて想像しながら文章とか英語を理解していく事の大切さがあると思っている。小学校に導入するなり、逆に中学校でも導入するなどしてカリキュラムの面から中１ギャップの解消する手段はいくらでもあるのではないかと思う。小中一貫施設一体型に拘らなければいけないのか。中１ギャップの解消という意味で何をすればいいのかを考えていくのが大事なのが、今一度立ち止まって見直していただきたいと思う。それをやっていくにあたって時間割が示されたが先生方の負担が増えていくのではないかとすごく思う。実際に賛成と反対のどちらが多いのかという事など現場の先生方の意見も気になりました。小学生の１年生の通学距離も気になりました。小学校を各地区に３校、中学生になると新しい人間関係で大人数の中でもまれていく経験をしてほしいので中学校１校という案が施設一体型ではないが、小中一貫教育のカリキュラムを立てた上で３校と１校の形で進めていけたら、子ども達の学習や環境が整っていくのではないかと思う。

百合が丘地区住民：子どものことを考えたり、通学路の事を考えると、A案で茶屋の部分を解消すればいいのではないか。現在でも一色小学校が西中に通う事が子ども達にとって辛いのではないかと感じている。逆の立場で同じようなことか起こるので辛いことになると思う。スクールバスがでるとか、公共のバスで通っても、結局費用的な問題がある。保護者の負担を考えたり、今後の人数的なことで考えても３校ではなくて、A案の２校がいい。しかし山西地区の児童が西中と二宮中に分かれることはなくしたい。そのための学区編成はお願いしたい。A案をベースに学区の編制を行うのが良い。３校ではなくて２校のほうが良い。

（緑が丘地区の方の質問についての回答）

教育委員：一貫教育の一番のメリットはつなぎの部分の段差を無くすことと、最大９歳差というメリットを生かすという２つを生かすことがポイントである。段差の解消はカリキュラムとか、３年生４年生ぐらいの時から中学生の姿を見せる事が大事だと思う。先の姿を少しずつでいいから見せてあげる。それは社会に出てもそうである。先の世界をみせてあげて将来、遠くはこうなる、来年はこういう姿になる、ちゃんと子ども達に見せてあげることが大事であると思う。施設一体である意味はそこにあると思う。先の姿を見せてあげる。大原学院を見学して体感したことはまさにその姿である。３年生の教室の近くに８年生・９年生の教室がある。結構隣接し

ている。８年生・９年生が廊下でプリントボックスから自分で紙を取り出して自分で勉強する。その姿を３年生、４年生は日常的に廊下で見ている。大きくなったらお兄さん・お姉さんになったら自分で勉強するんだ。部活動にしても一緒にやれば、あんなに上手になるんだと体感できる。このように子どもたちに見せてあげることが大事である。大原に行って体験した事で９年生と一緒に給食を食べた。その教室にいた人数は 10 人ぐらいで、ほぼ全員が私に対して話しかけてくる。「どこから来たの？」「お仕事は何をしているの？」「今日は何しにここへ来たの？」と全員が話しかけてきた。それ位、外の人に抵抗がなかった。人間関係とか高１ギャップ等先程の話しにもあったが、そういう抵抗感が減少していく効果があるのではないかと感じた。９年間をつなげて１つのバンドとして見せてあげることが必要であると感じた。中高一貫と小中一貫の違いは何かとよく訊かれる事がある。中高一貫とはそれぞれの個性を確実に伸ばしてあげる事。小中一貫はそこで個性を磨き上げていく基礎を固めてあげる事だと思う。人間的なもの、学力的なもの、体力的なものを固めてあげる事が小中一貫の期待される効果だと感じる。そういった効果をちゃんと発揮できるように仕組みを作っていくこと、それが我々に出来る事だと考えている。その効果を最大限に生かす事が二宮町の教育システムはこうあるべしというところに繋がっていくということが感じる。子どもの人数が減るのは避けられない。横の人数が減っていくのは避けられない。だったら縦で人数を確保する。人数の規模を確保してあげよう、縦にすると先生方の負担が増える。縦の教育の幅を広げあげるのが地域の力で横の幅を広げてやろう。そうやって縦の幅と横の幅を広げることによって、教育の根本的な質を確保してあげる。これが、これから二宮町が取り組むべき教育システムの構築です。この戦略を貫いていきたい。

部長：小中一貫教育校や施設一体型という話が沢山でてしまい説明の仕方がうまくなかったと思う。作る事が目的ではなく、今課題となっていること中１ギャップを含めて、いろいろなことを解決してより良い教育になり子ども達が成長していく、そこを目指すために施設一体型が良いと考えて提案している。

部活動については課題だと考えています。部活動のやり方自体も将来に向けて考えなくてはならない。同じようにそれぞれの学校でやるのではなく、例えば、この学校は野球で、この学校はサッカーと種目を絞って、やりたい子は指定校変更という形で学校を変える事も可能だし、例えばそこの学校に行って合同チームで活動することもできる。あとはもっと進んだ

話であるが、地域のスポーツクラブなど地域の方に支援をいただいて、町民運動場とか体育館でスポーツクラブ的なことで放課後集まって専門的な指導を受けて部活をやる。そんな風にやり方はいろいろでみんなで考えていかなければいけない時期にきているのではないかと思う。小中一貫教育校の事も考えながら進めていきたい。

一色小学校区住民：義務教育学校というのは、語気にこだわるわけではないが義務教育学校に例えば発達障害の人たちも入れると言うことですか。

教育長：そういう意味ではありませんが、インクルーシブ教育の観点から支援が必要な子ども達も希望すれば受け入れることが基本になっている。そこの所は今の状況と変わらない。国がそういうネーミングをしているで、小中の９年間が同居しているので義務教育学校としている。ただ名前の付け方はそれぞれで、例えば二宮学園とかそんな感じになる。

緑が丘地区住民：小中の学校の再編成について何通りか案がありますが、学校を新設するという案が何通りかあります。二宮町の新庁舎をどうするべきかと考えていく中で更に学校を新設するというプランは現実的ではないと思う。Ｆ案を除いた案はいずれも新設をするという内容が記載されているが、これは難しいのではないかと思っている。当初案Ａをもう一度解説していただきたい。

指導主事：当初案のＡ案は、今ある学区を崩すことは想定しないで、今ある学区を生かして小中一貫教育をするという事を考えた。地図で説明をすると青い地域の子ども達は一色小学校に通って、赤い地域の子ども達は二宮中学校に通うという事で、青い地域の小中学生は全員一色小学校へ、赤い地域の小中学生全員が二宮中学校へ通う事を想定した案です。ただ、人数的に学校施設の規模があるので第１に西中学校が一色小学校に移って、一色小学校で施設一体型の小中一貫校が出来る。その後に山西小学校も移るというものです。二宮中学校と二宮小学校の方も西中学校が一色小学校に移るタイミングでは、まだ施設規模が小さいので山西小が移るタイミングで二宮小学校が二宮中学校に移るという形になるとしています。この状態になるのは令和 12 年という案です。

緑が丘住民：当初案のＡ案が物理的に現実的と思う。１つだけ懸念しているのは学童の問題をどのように考えているのか。

部長：学童は学校の中で考えなければいけないと思っている。中学生が入ってきた場合それなりのスペースが必要と考えている。小学生の人数を考えると今よりも児童数は減少しているので、今あるものの活用と改修で場所的な確保ができたならと思う。これについては研究していく必要があると考えている。

緑が丘地区住民：Ａ案とＢ案の違いはなんですか。

指導主事：Ｂ案というのは使う校舎がまず一色小学校ではなく、西中学校になっているという違いがある。他の部分は学区に関しても同じです。山西小学校を使うと考えた時に２校間の距離がタイトになる。使う施設が南よりになってしまうので、半径２ｋｍの円から出てしまう地域のエリアが大きくなってしまう。違いはどうしても南寄りに２つの施設が位置してしまう。Ａ案だと南北にあるので円のエリアは広くなるという事でその違いが出てきてしまう。使う校舎が変わったという違いです。

部長：本日は長時間に渡り色々なご意見を頂きましてありがとうございました。本当に色々なお話が出来て参考になりました。今後、頂いたご意見を踏まえて、いろいろと見直しをさせていただきたい。教育委員会として子ども達によりよい学習環境と教育環境を提供してより良い環境の中で育って欲しいという思いだけです。そのことは皆様と同じと思う。そこをしっかり忘れないで取り組みたい。本日は長時間に渡りありがとうございました。